

興津地区 カルテ

データについて

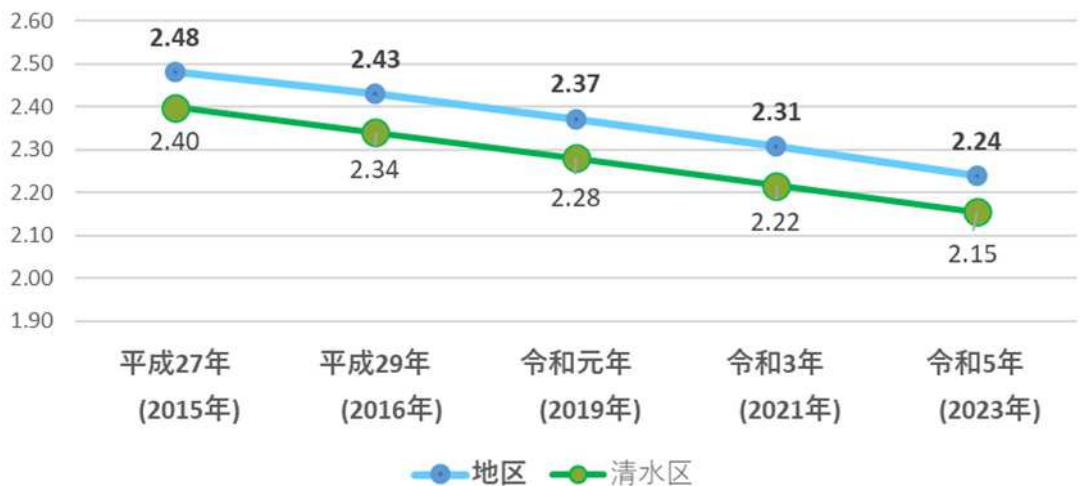
- ・カルテは住民基本台帳と自治会加入統計を利用しています。
- ・住民基本台帳は各年の3月31日の数値、自治会加入数は各年の4月1日の数値です。
- ・町名は住民基本台帳を採用しているため、自治会名と一部異なる場合があります。

興津地区の人口特性 令和5年3月 11,821人 5,281世帯 2.24人/世帯

●人口・世帯数の推移



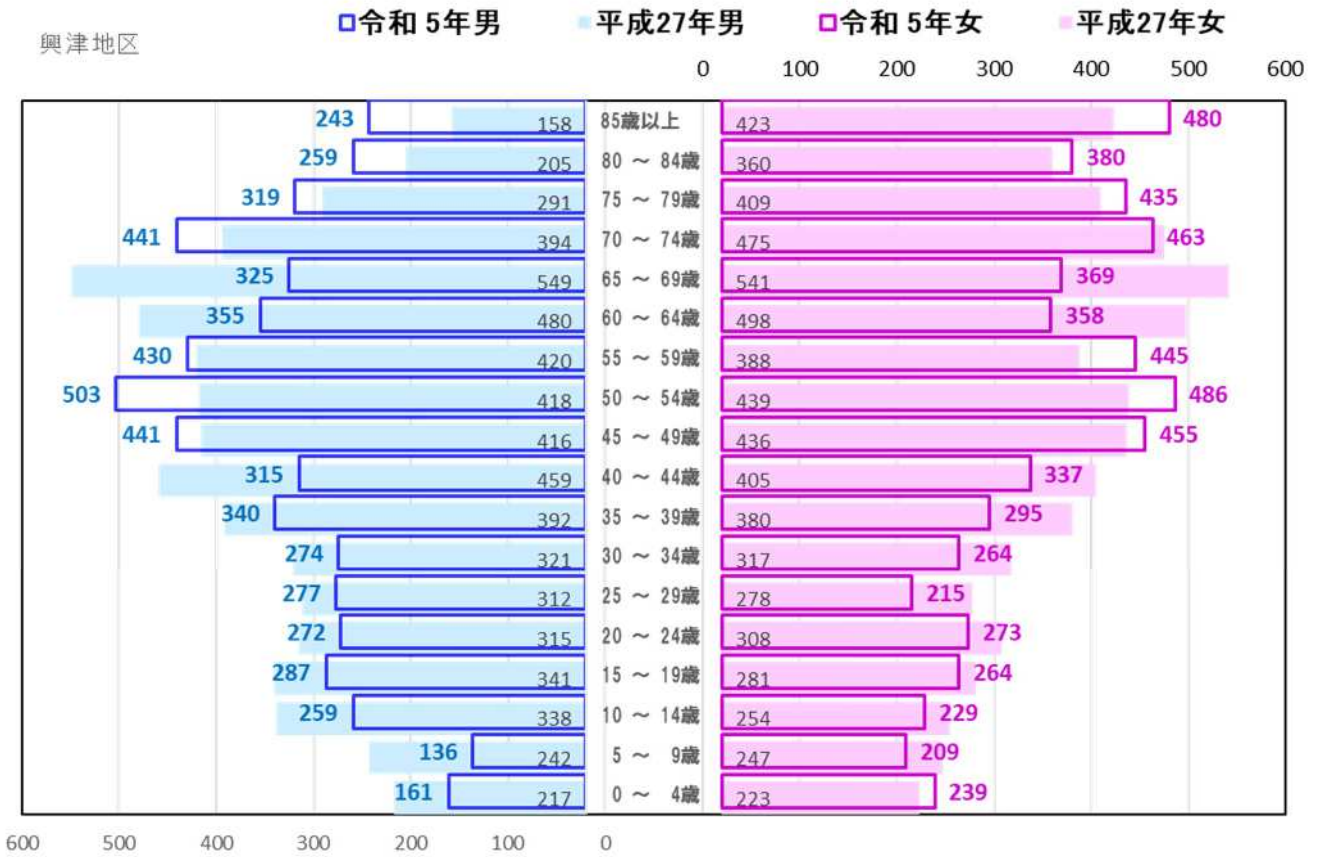
●一世帯当たりの人口推移



●65歳以上の高齢者を支える生産年齢層（15-64歳）

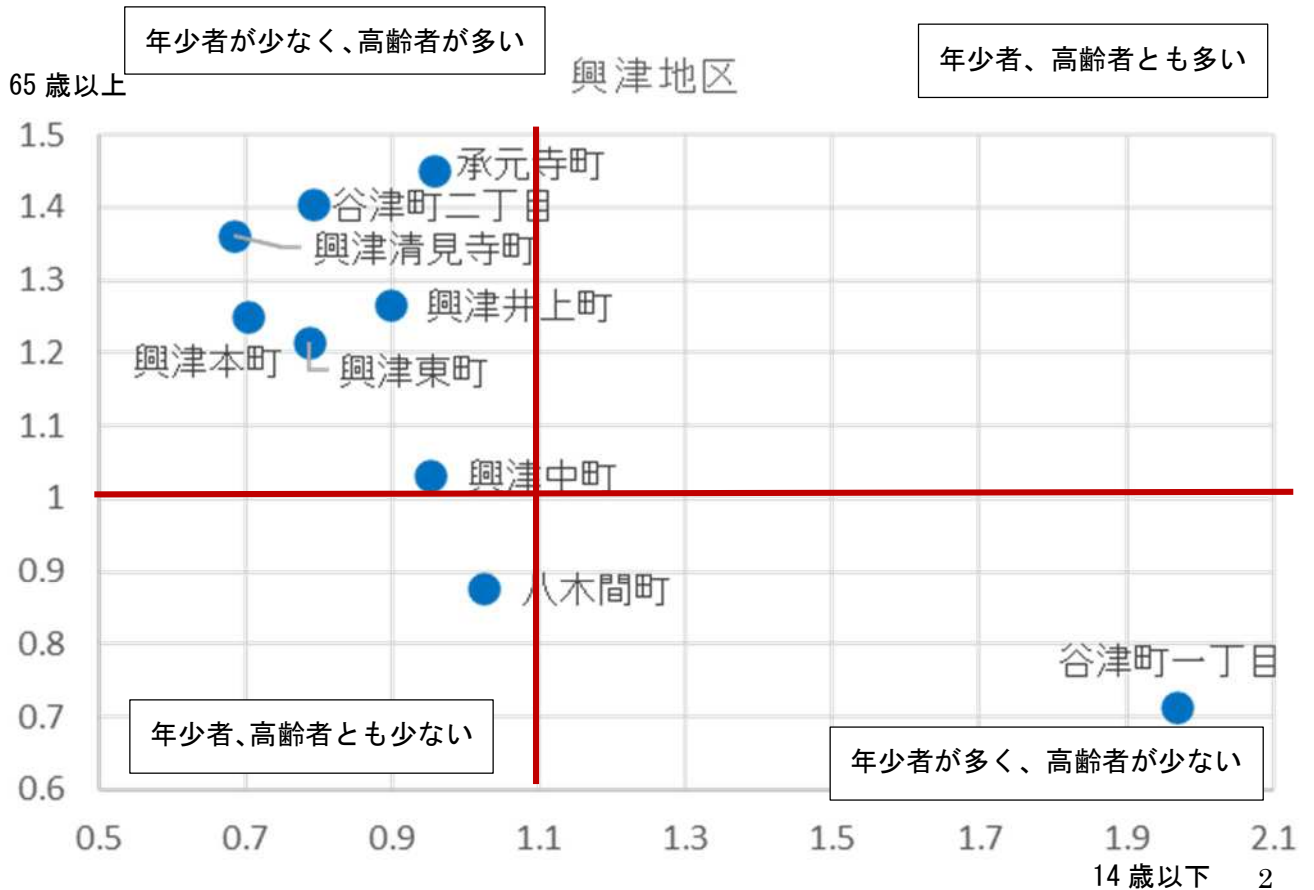
区分	平成27年 (2015年)	令和5年 (2023年)
地区	 2.00人	 1.63人
静岡市	2.16人	1.88人
清水区	1.98人	1.71人

●人口ピラミッド【平成27年(2015年)と令和5年(2023年)の5歳階級別男女別構成】



●町別の14歳以下と65歳以上の割合分布(清水区の平均値を1とした場合)

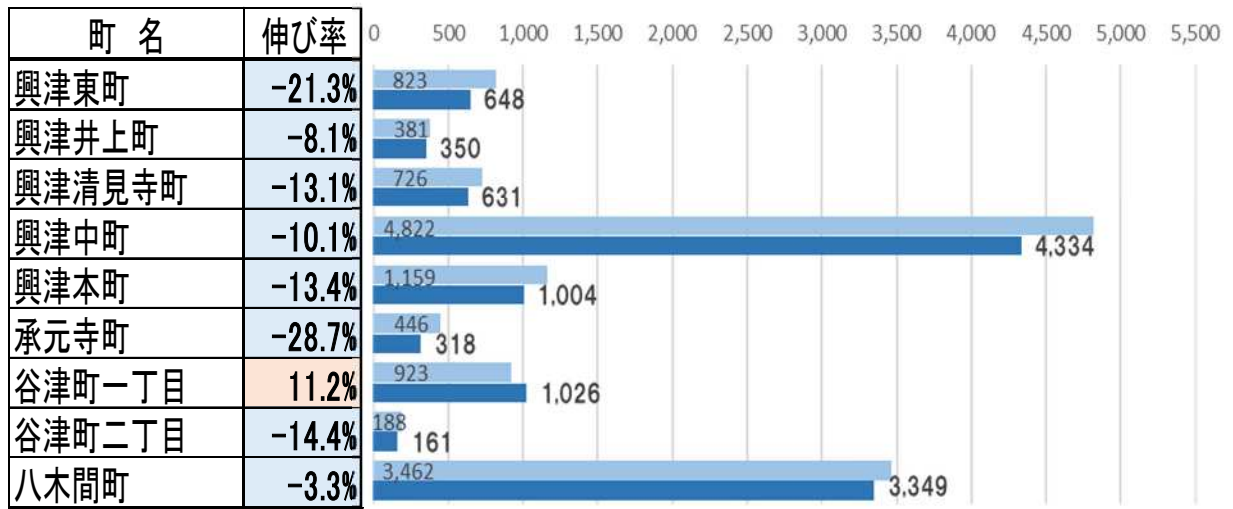
※年少者(14歳以下)高齢者(65歳以上)



●町別の伸び率と人口推移

【平成 27 年（2015 年）と令和 5 年（2023 年）の比較】

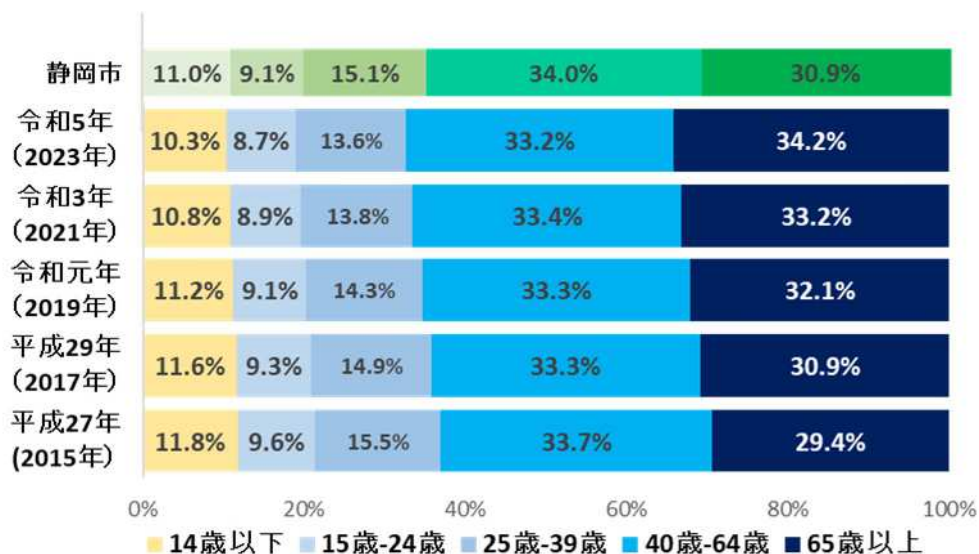
人口推移グラフ（上段平成 27 年 下段令和 5 年）



		人 口	
		平成 27 年 (2015 年)	令和 5 年 (2023 年)
興津地区	-8.6%	12,930	11,821
静岡市	-4.6%	713,564	680,913

●町別人口区分別割合

・年齢5区分別人口割合の推移



※15-24歳は高校から社会人(大学修士課程含む) 25-39歳は社会人(大学博士課程含む)

・令和5年人口3区分別：

市の割合より

青字 14歳以下の割合が低い場合

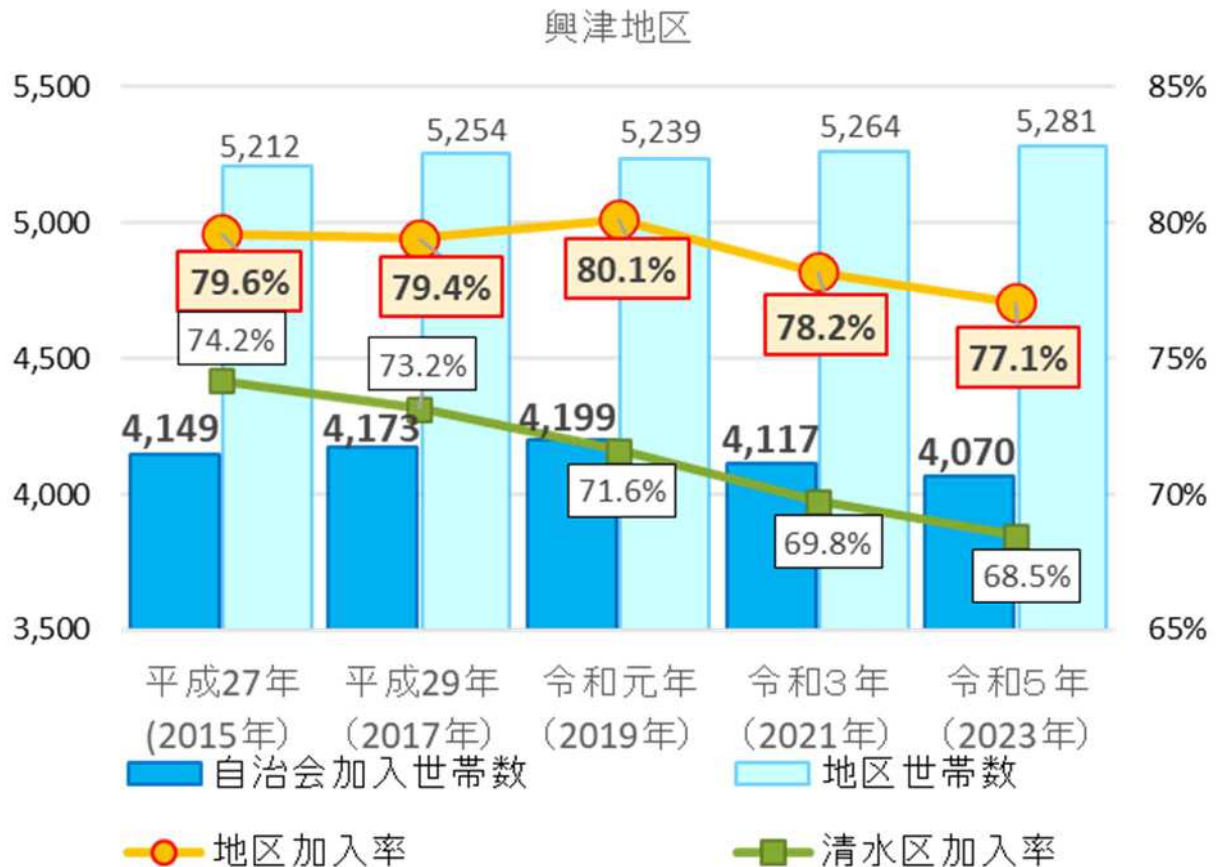
赤字 65歳以上、75歳以上の割合が高い場合

町名	令和5年階級別割合		
	14歳以下	65歳以上	そのうち75歳以上
興津東町	8.0%	40.3%	21.5%
興津井上町	9.1%	42.0%	22.9%
興津清見寺町	7.0%	45.2%	26.8%
興津中町	9.7%	34.2%	18.5%
興津本町	7.2%	41.4%	23.2%
承元寺町	9.7%	48.1%	30.8%
谷津町一丁目	20.1%	23.7%	10.5%
谷津町二丁目	8.1%	46.6%	26.7%
八木間町	10.5%	29.1%	14.9%
興津計	10.3%	34.2%	18.4%
清水区	10.2%	33.2%	18.7%
静岡市	11.0%	30.9%	17.2%

●自治会加入状況

令和5年

加入率	地区	77.1%	加入世帯数	4,070世帯
	清水区	68.5%	住民基本台帳世帯数	5,281世帯



興津地区コメント

- ・人口は減少傾向を示し、世帯数は増加傾向にあります。世帯人数が減少していることから、単身世帯や小家族化が進んでいるようです。
- ・人口の減少地区がほとんどですが、平成27年と令和5年の人口比較で11%以上増加している地区(谷津町一丁目)があります。
- ・令和5年の65歳以上を1人支える生産年齢(14歳から65歳)が市の1.9人より少ない1.6人で減少傾向にあり、若い世代が地区や自治会活動等への負担が増えることが見込まれます。
- ・さらに、自治会の加入率は市の値69%より高い77%ですが年々減少傾向が見られます。40歳から64歳の自治会活動等で中心的に活躍を期待される層の減少も見られます。

興津地区

地名のゆかり

興津の歴史の古いことは、「日本武尊が東征したとき、この辺りに部落があった」と、昔の書物に述べられていることから分かります。

平安時代には、ここに関所が置かれ、歌や旅日記にも「清見が関」という名が盛んに使われました。また、将門の乱後、この関の保護のため、清見寺が創建されました。

さらに、江戸時代に入ると、興津は東海道五十三次の一つとして栄え、明治、大正時代には、西園寺公が坐漁荘を構えるなど、温暖で美しい海岸は多くの有名人に愛されました。

地名の「おき」は海、「つ」は港の意味ですが、興津中町の宗像神社に祭ってある多岐都昆壳(おきつひめの)命(みこと)の名から出たとも言われています。この「おきつ」は、最初「息津」(平安時代の和名抄)と記され、あるいは、「沖津」と書かれたこともありました。しかし、中世のいつのころか、「興津」に変わったようです。



昭和初期の興津海岸

身延山道

興津中町の旧甲州街道入口に「身延山道」と彫られた古い石の道標が立っています。道標が示しているこの道は、昔から甲州街道と呼ばれていた、坂の多い道で、現在の国道52号線に付かず離れず身延へ通じていました。

身延山道は、いつごろできたのか分かりません。鎌倉時代に身延山が開かれていますので、当時からあったものと思われませんが、道らしい道になったのは、戦国時代の名将武田信玄が、駿河を狙うためにこの道を利用してからでしょう。

江戸時代に入ると、街道筋に宍原や万沢などの宿が置かれ、身延山に参詣する人が増えました。



興津中町にある道標

あんこのふるさと

興津の承元寺町にある八幡神社に2基の頌徳碑があります。北川勇作氏、内藤幾太郎氏の頌徳碑で、どちらも昭和12年に全国の製あん業者によって建立され、平成18年には碑文案内が作られています。

北川氏は明治11年承元寺町に生まれ、東京に出て製あん所の職工として働き、独立。店舗を広げていくなかで、あんこを作るための磨漉(とぎこし)機や煮炊釜、豆皮分離器を発明し、機械による製あん技術を確立し大量生産のを開きました。

内藤氏はそんな北川氏を援助しながら自らも開業し成功を収め、大日本製餡組合の創立発起人となった人物です。明治、大正と日本の製あん業界は、この二人が興したと言って過言ではありません。まさに、清水は近代製あん業発祥の地なのです。



八幡神社の頌徳碑

一碧楼水口屋（いっぺきろうみなぐちや）

水口屋初代当主、望月氏はかつて武田信玄の家臣で、400年ほど前に興津に移り住み、塩や魚などを買い付け、甲州へ物資を送る商人となりました。天正10年(1582)に初めて旅人を泊めたと伝えられ、江戸時代には興津宿の脇本陣として宿屋を営み、明治以降は、多くの政治家や文化人たちが別荘旅館として愛し、全国に名をはせました。さらに昭和32年(1957)には、昭和天皇、皇后両陛下もご宿泊されました。

昭和60年(1985)、時代の情勢から徐々に客足が減り、また後継者がいないことから、第20代当主が廃業を決断、約400年の歴史に幕を閉じました。

現在は鈴与グループの研修センターとして活用され、平成11年には「水口ギャラリー」が開館し、当時の資料や書簡、水墨画などが展示されています。



水口屋ギャラリー

興津川の鮎釣り

毎年5月20日頃、興津川では県内トップを切って鮎釣りが解禁されます。興津川に次いで狩野川、天竜川、大井川と解禁を迎え、本格的な鮎釣りシーズンに入ります。

毎年川の状態や遡上の状況で釣果も左右するので、釣り人のこころ騒ぐ季節となります。

「猿の恩返し」

昔、九州のある大名から大切な手紙を預かった飛脚が、これを江戸へ届けるために東海道を急いでいました。薩峠に差し掛かったとき、ふと磯の方を見ると、大きなタコが猿を海へ引きずり込もうとしています。飛脚は、猿が可哀想になって、タコを追い払ってやりました。

ところが、危ないところを助けられた猿は、何と思ったのか飛脚が持っていた手紙を取って、山の中へ走り込んでしまったのです。慌てた飛脚が猿を追いかけて山の方へ行くと、さっきの猿が手紙と何やらこも包みのような物を持って、こちらへやって来ました。

飛脚のそばへ来た猿は、二つの品を置いて山の中へ去ってしまいました。不思議に思った飛脚が、この包みを開いてみると、中から由緒ありげな刀が出てきました。

この刀は、鑑定の結果、五郎正宗の名刀とわかり、「さる正宗」と名付けられ、この大名家の家宝になったということです。



薩埴峠からの風景